

過保護なファイアンセ

須藤晶未は自室の白いドレスサーの前に座っていた。そして、溜息をつき、鏡の中の自分を見つめる。

大きな目だけがやたらと目立つ顔は、友人に可愛いと言われているが、いわゆる童顔だ。二十三歳で、もう少女とは言えない年齢のはずなのに、どこか頼りない。それはこの童顔のせいだと思っていたが、本当にそうだろうか。

ストレートの黒髪は背中の中真ん中あたりまで伸びていて、ハーフアップにまとめられている。この黒髪が生真面目な雰囲気をもたらし、ますます女子学生のようなイメージがつきまどってしまう。唯一の自慢は白く滑らかな肌だった。とはいえ、黒髪に白い肌という組み合わせでは、世慣れた成人女性ではなく、浮世離れたお嬢様に見える。しかも今の自分は、白地に花模様があしらわれた、膝下丈のワンピースを着ている。ウエスト部分には共布のベルトがついていて、それがまたいかにもお嬢様風なのだ。

だが、それも仕方ない。一人っ子の晶未は子供の頃に両親を亡くし、祖父母に育てられたので、彼らが顔をしかめるような格好はできなかつた。普通の女の子みたいにミニスカートを穿いて、髪

を染めたり巻いたりしたくても、絶対にできない。

別に、祖父母が怖いわけではなかった。ただ、育ててくれた彼らを悲しませたくないだけだ。

それに、晶末は本当にお嬢様なのだ。祖父は建設会社のオーナー社長で、その会社はかなりの業績を上げている。当然、祖父は相当な資産家であり、この洋風建築の家は屋敷と呼ぶべき大きさだった。いわゆる高級住宅地に立っており、敷地はざっと二百坪ほどで、庭にはプールまである。

晶末の部屋は屋敷の二階にあり、広々としている。祖父母の子供は晶末の父だけなので、孫は晶末しかない。そのため、祖母は晶末の部屋のインテリアに力を入れた。ただし、晶末の趣味とは関係なく、祖母が孫娘に似合うと思っているインテリアだ。

その結果、この部屋には花模様の壁紙が貼られ、ロココ調の家具ばかりが置かれることになった。目の前の白いドレッサーをはじめ、飾り戸棚、ライティングデスク、ソファにテーブル。すべて、フランスから輸入されたものだ。

どれも豪華だが、何より圧巻なのはベッドだった。白い薄布の天蓋があり、ベッドカバーには、ふわふわしたレースがついている。まるでお嬢様のベッドのようにロマンティックだ。

つまりこの屋敷で育ってきた晶末が祖母の期待に応えようと思えば、こんなお嬢様スタイルでいるしかなかったというわけだ。

晶末は、もう一度溜息をついた。

たまには髪を染めてみたい。金髪にしたいとは言わない。控えめのダークブラウンくらいでいい。短く切ってみたい気持ちもある。物心ついてから、今まで一度も肩より短くしたことがないのだ。

ファッションも、もっと活動的なものにしてみたい。ミニスカートを穿いて、脚を大胆に出してみたい。ジーンズも穿きたいし、Tシャツだって着てみたかった。

わたし、そんなにおかしなことを夢見てるわけではないと思うんだけど……
いつまでお嬢様でいればいいのだろうか。そろそろ自分の好きな格好をして、好きな生き方をしてもいいのではないか。

そんなことを考えながら、晶末はドレッサーの上に置いてある宝石箱を開け、中に入っていた一粒の真珠のネックレスをつける。今日の夕食には特別なお客様を招いているので、ちゃんとした格好で食堂に下りてくるようにと、祖父に言われているからだ。

祖父母は昔気質の人だ。そして、過保護だった。晶末は祖父母の過保護に呆れながらも、彼らを悲しませたくない一心で、ずっと言うことを聞いてきた。

でも……わたしはもう大人よ。

確かに子供っぽく見えるが、大人の女性だ。晶末は女子大を卒業した後、祖父の会社で働いている。上司や先輩から言われたことには素直に従っているし、お茶くみだって率先してやってきた。けれども、社長の孫娘ということで、周りは腫れ物に触るような態度で接してくる。入社して一年も経つのに、コピーを取ったり、書類を揃えてファイルしたり、そのファイルの整理をしたり……とにかく雑用ばかり任されているのだ。

最初は電話応対もしていたが、そのうち上司からしなくていいと言われた。緊張のあまり、失敗したことがあるからだ。一時期やっていたパソコンに数字を入力する仕事も、上司が別の社員にや

らせるようになった。

祖父の会社はいずれ晶末が継ぐことになる。いや、継がせてほしいと子供の頃から思っていた。だから、学校の勉強もずっと頑張ってきたというのに、こうして社会に出てみると、学校の勉強など何の役にも立たない。晶末は戦力外と見なされ、それでも社長の孫娘だという理由で、雑用をやらせてもらっているに過ぎないのだ。

こんな自分が齒がゆくて仕方ない。上司に、もっと仕事をくださいと直談判じかたんぱんしたこともあるし、祖父にも訴えた。しかし、祖父は笑って言った。

『おまえはそのままいいんだよ。難しいことで可愛い頭を悩ませるんじゃない』

会社の役に立ちたいのだからと言っても、相手にされなかった。どうやら祖父は晶末が早く結婚すると思っっているらしい。そうしたら、会社を辞めるものだとも。

わたしには男友達すらいらないのに！

当然、結婚する相手など今のところ存在しない。中学から大学まで女子校で、周りには異性などいなかった。職場でも、社長の孫娘ということで男性社員から敬遠されている。これで、どうやって未来の花婿はなむこと出会うことができるだろうか。

もっとも……恋をしたことはあるわ。

晶末はまた溜息ためいきをつき、宝石箱を閉じた。その恋の相手が、自分を恋愛対象として見ていないとわかったときのつらさを思い出すと、恋なんてしないほうが良かった。

とにかく、まだ結婚する気はないし、もっとちゃんとした仕事をしたい。そのために、祖父の会

社を辞めることも考えていた。

祖父は、きつと怒るだろう。祖父を傷つけたり悲しませたりしたくなくて、ずっといい子でいた。だが、ときどき限界を感じてしまう。

結局、わたしは根っからのいい子ってわけじゃないんだわ。

晶末は立ち上がり、白い飾り戸棚の上に置いてあるアンティーク風の時計を見た。そろそろ夕食の時間だ。

息苦しさを感じながら、晶末は部屋を出て、一階へ向かった。

優雅な曲線を描く階段を下りると、そこは玄関ホールとなっている。玄関ホールといっても、かなり広く、豪華な花が飾られた大きな花瓶が置かれている。左へ行くと、居間や食堂、キッチン、浴室などがあり、右へ行くと、応接室や祖父の書斎、サンルームがある。

特別なお客様とやらは、もう来ているのだろうか。そう思いながら耳を澄ますと、誰かの話し声が聞こえてくる。応接室のほうからではなく、居間からだ。晶末は居間の扉を開けて、はっと身体を強張こわばらせた。

そこにいたのは、三鷹みたかひろや宏哉ひろやだった。

祖父の親友の孫息子で、晶末は子供の頃から彼を知っている。

宏哉は、晶末の初恋の相手だ。そして、今もいじましく恋をしている相手でもあった。

三十二歳の彼は長身ですらつとしており、スーツがよく似合う。今日もライトグレーのスーツを

着こなし、長い脚を組んでソファに座っている。

特別なお客様とは、宏哉のことなのだろうか。彼は招待されなくても、しょっちゅうここに来ているというのに。

向かいに座る祖父母と話をしていた宏哉は、扉が開く音を聞いて、こちらに目を向けてきた。彼と目が合い、晶末はドキッとすする。そんな反応などしたくないのだが、どうしても止められない。

切れ長の鋭い目、意志の強さを表すような力強い眉。鼻筋が通っていて、整った顔をしている。今しがたまで微笑んでいた口元は、晶末を見るなり、ムツとしたように引き結ばれた。

彼は、よほどわたしのことが嫌いなんだわ。

もしくは、過保護な兄のつもりなのか。宏哉は晶末を見るたびに、忠告すべき点を探し出そうとしているようだった。今も何か小言を言いたくてたまらないのだ。

もう、過保護にはうんざりなのに。

晶末はそう思いながらも、彼に挨拶した。

「こんばんは、宏哉さん。あなたが今日のお客様だとは知らなかったわ。お祖父様は何も教えてくださらなくて」

宏哉は皮肉めいた笑みを晶末に向ける。

「僕が客だと知っていたら、君はこんなにおしゃれをしなかっただろうね」

そうだと言いたいのが、そんなことはない。ここまで着飾りはしなかったと思うが、少しは美しく

見える装いをしただろう。

そこで、祖母が呆れたように口を挟んだ。

「いきなり喧嘩はやめてね。あなた達ったら、顔を合わせればいつも口喧嘩ばかりして。いい加減、大人なんだから仲良くしてちょうだい」

そんな祖母に、宏哉はにっこり笑ってみせた。

「喧嘩じゃありませんよ。ただのコミュニケーションです。仲がいいから、こういった軽口が叩けるんです」

物は言いようだった。いつからか、彼は晶末に辛辣な態度を取るようになった。それをごまかすために、こんなことを言うのだ。

いつから……って、あのときからだわ。わたしの二十歳の誕生日からよ。

晶末は思い出して、胸にかすかな痛みを感じた。

宏哉の家族と晶末の家族は、昔から付き合いがある。そんなわけで、晶末は物心ついたときから宏哉のことを知っていたが、子供の頃は年の離れた兄みたいに思っていた。彼に恋をしたのは、十四歳のときだった。

反抗期まったただ中だった晶末は、夏休みに入った途端、友人と一緒に髪を染めようとした。そんな晶末に、祖父は激怒した。祖父に叱られたことなどほとんどなかった晶末はショックで、泣きながら部屋に閉じこもった。

たまたま用事があって屋敷に来ていた宏哉は、泣きじやくっていた晶末を慰め、優しく諭してく

れた。祖父母が晶未のことをどれだけ大事に想って、大切に育てているかということをはっきりとわかってくれたのだ。

宏哉に頬の涙を拭かれ、顔を覗き込まれた瞬間、晶未は心のときめきというものを初めて知った。そして、あのときからずっと彼に恋をしている。

けれども、宏哉のほうは晶未のことを、未だに妹扱いしていた。彼のことは、もう諦めたほうがいいのかもしれない。そうでもしないと、他の男性に興味を持たない。

わたしは二十三歳だというのに、まだ男の人と付き合ったこともないんだから。

それもこれも、この宏哉のせいだ。晶未は自分をこんなに苦しい気持ちにさせる彼が憎かった。いや、今もお望みのない相手に恋をしている自分の愚かさ(ちが)が腹立たしかった。

それなのに、こうして彼と顔を合わせると、胸がときめいてしまうのだ。

まったく……信じられない！

「そろそろ夕食を始めようか。食堂に行こう」

祖父は立ち上がると、祖母と手を繋いで、食堂に向かった。二人とも七十代前半だが、今もすごく仲がいい。晶未もこんな結婚がしたいと思っっている。永遠に続く愛情というものは確かにあるのだから、それがわかっている以上、愛情のない結婚など絶対にしたくなかった。

宏哉も立ち上がり、晶未に肩をすくめてみせる。

「君は手を繋がないでもいいだろう？」

晶未はその素っ気ない口調に傷つきながらも、頷いた。

「もちろんよ。子供じゃないんだもの」

それに、二人が愛情で結ばれているわけでもないのだから。

ああ、いつか彼が、わたしは妹ではないと気づく日は来るの？

なんだか、永遠にこういう関係が続いていくような気がしてきた。いつかは彼も結婚するだろう。

そのとき、晶未は必ず式に招待される。つまり、彼が花嫁にキスするのを見ることになるのだ。

そんなの、絶対に嫌っ！

「何が嫌なんだ？ 僕が夕食に呼ばれたことか？」

宏哉に尋ねられて、晶未は思わず口に出してしまったことに気づき、笑ってごまかした。

「なんでもない。ちよつと考え事していただけ」

宏哉は呆れたような表情で、晶未を見る。

「君は相変わらず嘘が下手だね。素直なのはいいが、もう少し世渡り上手にならないと。きっと会社でもお嬢さん扱いされているんだろうな」

あまりにも凶星すぎる彼の言葉は、晶未の胸にグサツと刺さった。

「……余計なお世話よ」

だいたい、説教なんか聞きたくない。特に、宏哉の説教は。

そうよ。彼の口からは愛の囁き(ささや)き以外、聞きたくないのよ。

もっとも、それこそ宏哉が言いそうにないことだが。

とにかく彼は晶未を子供扱いしていて、顔を合わせれば、何かしら説教をしてくるのだった。

「君のそういう態度はよくないよ。僕は君のその仏頂面を見るために、ここへ来たわけじゃない。君のお祖父さんが夕食に誘ってくれたからだ。忙しい時間を割いて来たのに、君の不機嫌な態度に煩わされるなんてごめんだね」

仏頂面……。不機嫌な態度……

晶末は落ち込んだ。恋する相手にこんなことを言われる自分が哀れだった。だが、動揺を彼に悟られたくない。嘘が下手だと言われたが、それでも嘘をつかねばならないときがある。特に、自分のプライドを守るためには。

「わかったわ。あなたの時間を無駄にしないために、さっさと食堂に行きましょう」

晶末は宏哉から顔を背けて、食堂に向かった。彼も後ろからついてくる。後ろ姿を見られていると思うとなんだか緊張してくるが、それも彼にとってはどうでもいいことなのだ。

食堂には何人も掛けられる大きなテーブルがあった。その奥のほうに四人で座ると、ケータリングのスタッフがグラスにワインを注いでくれる。普段の食事は家政婦が作っているが、こうした特別な食事は一流店のシェフを呼び、作ってもらうのだ。でも……どうして宏哉さんだけのために？

宏哉は、よくこの屋敷に出入りしている。祖父母にとつて孫同然である彼をわざわざ招いて、特別な食事をするというのは、一体どういうことなのか。

そんなことを考えていると、なんだかおもしろいはずのフレンチも、あまりおいしく感じない。

ふと、向かい側に座る宏哉と目が合う。晶末は慌ててうつむき、ちぎったロールパンにバターを

塗った。

そこで、祖父が宏哉に話しかける。

「宏哉君は今、交際している女性はいいるのかな？」

ドキン。

晶末の手が震える。

宏哉が今まで何人もの女性と交際してきたことを、晶末は知っている。晶末はまだ少女の頃、彼をよく付き合っている相手のことを話してくれたのだ。最近、そんな話もしてくれないが。

もちろん、彼の口から女性の話なんて聞きたくなかった。彼がデートしたり、恋人に微笑みかけたりする場面が頭に浮かんで来て、嫉妬してしまうからだ。

宏哉は祖父の質問に答えた。

「今はいません。仕事のほうが大事ですから」

晶末はその答えを聞いて、ほっとした。少なくとも、今夜は彼の恋人の話をお聞きせずに済みそうだ。「仕事はもちろん大事だが……。君もそろそろ結婚を考えるべきではないか？」

その祖父の言葉で、晶末の心は再び乱れた。

宏哉さんが結婚なんて……

彼の年齢を考えれば、もう結婚してもおかしくない。けれども、彼が結婚するなんて、考えたくなかった。彼が他の誰かと結婚するのを、素直に祝福できる自信もない。彼に幸せになつてほしくないわけではないのだが、それでも落ち込んでしまおう。できれば、そんな日は一生来てほし

くない。

とても我儘だとは思うけど……

宏哉が独身でいる間は、晶末にもほんの少し望みがあるような気がするのだ。

自分の気持ちに気づき、振り向いてもらえる。

彼が結婚してしまつたら、その望みは完全になくなる。晶末は不倫や浮気が大嫌いだから、きっぱり諦めるしかないのだ。

宏哉は祖父の質問に少し考えてから、頷いた。

「そうですね……。僕もそろそろ家庭を持つべきだとは思っているのですが……」

「まだ相手が見つかっていないと？」

「まあ、そんな感じです」

祖父はそこで、話題を変えた。仕事について尋ねられると、宏哉は俄然、情熱的に話します。今の彼にとつては、恋愛や結婚より、仕事のほうが大事なだろう。

祖父母と話す宏哉は生き生きとしていて、とても魅力的だ。祖父母に対する優しさや細やかな気遣いも感じられて、やはり彼のことを嫌になれそうにない。晶末も彼に大人だと認められたら、そんなふうに接してもらえらるだろうか。

二十三歳は充分大人だと思っただけ……。彼にとつては違うのかしら。

少なくとも、二十歳の誕生日まで、宏哉との仲は良好だった。彼はいつも優しくしてくれたし、冗談を言ったり、からかったりもしてくれた。それこそ、妹に接するような態度だったかもしれない。

いが、押しつけがましい説教をしてくることなどなかった。

まだ少女の頃、晶末は二十歳になったらデートしてほしいと、冗談めかして宏哉に頼んでいた。彼はそれを覚えていて、誕生日にドライブに連れていってくれたのだ。

せっかくのデートだからと、その日のために祖母が買ってくれた大人っぽいワンピースを着ていった。とはいえ祖母が選んだので、あくまで上品なものだったが、それでも大人の雰囲気は味わえた。化粧はもちろん、髪を美容院でセットしてもらって、ハイヒールも履いた。

夜には、ラグジュアリーホテルの高層階にあるフレンチレストランに連れていってもらった。素晴らしい夜景の見える窓辺の席で、宏哉に似合う大人の女性になれたような気がして、晶末は最高に幸せだった。

それなのに……

食事をしてしていると、宏哉は次第に口数が少なくなり、帰る頃には、むっつりと黙り込んでしまったのだ。

ずっと女子校だった晶末には初めてのデートで、しかも憧れの人とだから、ドライブ中、はしゃいでしまった。それが彼の気に障ったのかもしれない。レストランに入ってからは上品に振る舞っていたはずだが、彼の機嫌は直らなかつた。

晶末はそのデートで、二人の仲が進展することを夢見ていた。今になって考えれば、愚かなことだ。今まで自分を妹のようにしか思っていなかった男性が、たった一度デートしただけで、一人前の女性として見てくれるはずがない。いくら二十歳になったからといって、すぐに中身が変わるわ

けではないのだから。

それでも、帰り際に頬にキスくらいしてもらえるのではと期待していた晶未は、完全に裏切られることになった。宏哉は晶未を自宅まで送り届けると、顔も見ずに言ったのだ。

『今日は楽しかった。それじゃ、また』

楽しくなさそうな顔で楽しかったと言われれば、もちろん傷つく。年が離れた晶未が話す内容など、興味が持てなかったのかもしれない。だとしても、せめてもう少し本当らしく言ってほしかった。

だが問題は、その後のことだった。あの日を境に、彼の態度は変わったのだ。それまで優しい兄のようだった宏哉が、ひどく過保護な兄へと変身してしまった。口を開けば、スカートが短いだの、化粧が濃いだの、夜遅くまで遊んではいけないだのと注意をし続ける。

晶未のスカート丈はせいぜい膝が出るくらいだというのに、彼は短いと言う。化粧に関して、ほとんど素顔でなければ納得してくれない。マスカラを塗っただけで派手だと言われ、口紅を塗れば男を誘っているなどと、言いがかりをつけてくるのだ。

そう。まさしく言いがかりだった。一体、彼に何が憑りついたのでだろう。そう思わずにはいられなかった。

そして、あれから三年経った今もそれは続いていて……

宏哉は未だに過保護な兄のように振る舞っている。だが、悲しいことに、晶未はまだ彼のことが好きだった。いつそ嫌いになれたらと思うが、そうもいかない。彼は、やはり魅力的すぎるのだ。

外見だけではなく、祖父母に対して優しいところや真面目なところ、それから仕事ができるところもだ。

宏哉の祖父は三鷹コーポレーションという大企業の会長で、父親は社長だ。他の親族も、役員として名を連ねている。彼はいわば御曹司なのだが、長男ではない。兄は三鷹コーポレーションの後継者として辣腕を振るっているものの、宏哉自身は父親とあまり折り合いが良くないこともあって、大学生のときに起業した。ソフトウェアの会社を興し、自分の力で大きく発展させたのだ。

今では、父親とも和解しているようだ。父親が宏哉の力を認めてくれたのだろう。もし起業しなかったとしても、三鷹コーポレーションでそこそこの役職につけたと思うが、一国一城の主としてのプライドは持ち得なかったに違いない。

今、宏哉は祖父に、将来のことについて話している。どうやら今の会社を、三鷹コーポレーションに匹敵する大企業にしたいと考えているようだ。晶未はなんとなく、彼の会社はいずれ三鷹コーポレーションの傘下に入るものだと思っていたので、驚いた。

この人は、すごい人なんだわ……

彼は自分の力で運命を切り開いた。そして、これからも同じようにやっていこうとしている。晶未がすごいと思うのは、そういうところだ。楽な道は選ばず、むしろ茨の道を歩いている。そのことが、彼の人間性に深みを与えていると思う。

苦勞を知っているからこそ、誰にでも優しくして、決して怒ったりしないのだ。

でも……それなら、どうしてわたしにだけひどいことを言うの？

晶末は納得がいかなかった。

わたしが祖父の会社に入って、楽な道を歩いているからかしら。でも、他の会社で働くことを考えていたとき、祖父の会社に入るように勧めたのは彼だわ。

それとも、自分は存在するだけで彼を苛立たせてしまうのだろうか。そんなふうに思いたくはないが、顔を合わせるたびに、彼は晶末をじろじろ見てくる。上から下まで何も見逃すまいとしているかのように眺め、少しでも変化があれば、目ざとく見つけて指摘してくるのだ。

まったく、どうしてこうなったのか、さっぱりわからない。

ふと気づくと、もうみんな食べ終わっていた。祖父はグラスに残っていたワインを飲み干すと、機嫌よさそうに言う。

「コーヒーとデザートは、居間のほうでいただく」

居間のソファで寛くわんぎながら、まだ何か話そうというのだろうか。晶末は少しうんざりする。食事

中の会話にも、あまり参加しなかった。なんとなく、この食事会自体が気に入らなかつたからだ。宏哉が客なら、そう言えはいいのに、祖父は『特別な客』としか言わなかつた。どう考えても、その理由がわからない。一体何を企たくらんでいるのだろう。

四人は居間に移動し、ソファに座った。ケータリングのスタッフがコーヒーと一緒に持ってきてくれた可愛いケーキに、晶末は思わず釘付けになる。

フォークですくっては口の中に入れて目を閉じ、蕩よろけそうなほど甘いケーキを味わう。ふと目を開けると、宏哉がからかうような目で見ていた。彼はきつと、晶末が子供だと思っているのだろう。

そんなことはないのに。ただの甘党なだけなのに。

コーヒーにミルクと砂糖を入れようとした晶末は、自分の行動を観察している宏哉の眼差しに気づき、ミルクだけにしておく。いつそブラックのほうがよかつただろうか。いや、大人になつても砂糖やミルクを入れなくては飲めないという人は、たくさんいるはずだ。

祖父はコーヒーを一口飲むと、晶末を見て、それから宏哉を見た。

「実は……二人に言っておかねばならないことがある。私はそろそろ引退しようと思っているんだ」

その言葉に、晶末は驚いた。自分が会社を継げるようになるまで、祖父は引退しないと思ひ込んでいたからだ。

今の晶末は会社を継ぐどころか、戦力外である。いや、戦力外どころか、問題外と言ってもいいくらいだ。いくら孫娘に甘い祖父でも、今の晶末に会社を任せるほど愚おろかではないだろう。つまり、祖父の会社を指揮するのは、自分ではない

しかし、これほど唐突に引退すると言いだすなんて、祖父はどこか悪いのではないだろうか。晶末は急に不安に襲われる。

元氣そうに見えるが、もう若くはないのだ。以前に比べたら、背中は丸くなっているし、歩くのも遅い。そう思うと、ずいぶん年を取っているように見えた。

「お祖父様……もしかして、どこか身体が悪いの？」

晶末がおずおずと尋ねると、祖父は首を振った。それを見て、晶末はほつとする。引退したつて

構わない。ただ、祖父が元気でいてくれさえすればそれでいいのだ。

でも、会社は誰の手に……？

会社は祖父が若い頃に興じたものだ。同族経営がいいかどうかはともかくとして、晶末は心情的に、会社を他人の手に委ねたくなかった。だが、今の自分は経営する力などない。

祖父の顔を窺うと、その眼差しは宏哉に注がれていた。

「宏哉君、我が社を君に任せたいと思っている」

晶末は愕然とした。同時に、その話をするために、祖父は宏哉を招待したのだと気づく。宏哉自身も予想していなかったらしく、見るからに驚いていた。

「しかし……社内にも優秀な人材がいるのでは……？」

「いや、私は優秀な『身内』に任せたいんだ。もちろん、君にはすでに成功している会社があるのだから、我が社を君の会社の子会社にしてもらっても構わないと思っっている」

祖父にとつて、宏哉は身内の人間ということなのだろう。祖父の親友の孫ということ差し引いても、彼はよく一人でこの屋敷を訪れ、祖父母を気遣ってくれていた。まるで、本当の孫であるかのように。

晶末は宏哉が祖父に高く評価されていると知って、胸が熱くなった。過保護で口うるさくても、やはり彼のことが大好きなのだ。

「身内と言ってもらえるのはありがたいですが、僕は他人ですし……」

「いや、実際に身内になってもらいたいと思っっている。つまり……」

祖父は、ちらりと晶末を見た。

「晶末の婿になつてくれないだろうか？」

晶末は驚いて口を開けたが、言葉は出てこなかった。それほど衝撃的な発言だったからだ。宏哉を見ると、彼も愕然としている様子で、こちらに視線を走らせた。彼と目が合ったとき、晶末は自分が口を開けっ放しであることに気づき、慌てて閉じる。

晶末が宏哉を好きなことを、祖父が知っているはずはない。この三年間、宏哉からあれこれ小言を言われるたびに、晶末は反発してばかりいたのだから。つまり、祖父は宏哉を身内にするために、晶末と結婚させようとしているのだ。

祖父母のことは大事に想っているし、できるだけ彼らが望むようにしてきた。だからこそ今、自分はこの格好でここに座っている。けれども、結婚のことまで勝手に決められるとは思っていなかった。

結婚なんて……

宏哉のことは好きだ。できれば、振り向いてほしいと思っっている。それでも、今すぐ結婚することまではまだ考えていない。

それに、晶末は宏哉と結婚するなら、愛されて、プロポーズされたかった。決して、会社のおまけとしてもらってほしいと、祖父に差し出されたいわけではない。

ああ、お祖父様はこのために、さつき宏哉さんにいろいろ尋ねていたんだわ。結婚や仕事のことや、付き合っている人がいるのかどうかまで……

でも、お祖父様はどうしてわたしには何も訊きいてくれなかったの？ わたしだって当事者なんだから、訊きくべきだと思うんだけど。

そう思いつつも、晶末はあまりにも動揺していたので、祖父にどう言っいいかわからなかった。宏哉はじつと晶末を見つめていたが、やがて何故なにだか深く頷うないた。そして、祖父に視線を戻す。「婿むこ養子は、お断りします」

その一言に、晶末は深く傷つき、うつむいた。自分だって、こんな形で結婚なんてしたくない。それでも、彼に断あられると悲しくなってくる。そんな晶末をよそに、祖父は冷静に話を続けた。

「そうか。実は君のお祖父さんからは、了解を得ていたのだが……。では、婿むこ養子でなければ話を受けてもらえるのか？」

「はい。婿に入らなくてもよいのであれば、喜んで晶末さんと結婚させていただきます」
「ええっ？」

予想だにしない宏哉の発言に驚き、晶末は顔を上げた。目が合うと、彼はニヤリと笑う。

「そういうわけだから。近いうちに指輪を買いにいこう」
「えっ……ちよつと……待って！」

晶末は助けを求めて、祖母を見た。だが、祖母は目につすら涙を浮かべて、ハンカチで目元を押さえている。

「まあ、よかったわ……。これで晶末の将来も、会社の未来も安あん泰たいね……」

「お、お祖母様……?」

祖父のほうはといえば、上機嫌で宏哉と握手している。

「いやあ、話を受けてもらえてよかったよ。それじゃ、会社の株式は、結婚祝いとして君に譲渡することでしょう」

「いえ、株式は購入させていただきます。それくらいの資金はありますし、晶末さんと結婚して社長社長の座に収こまったと言いわれては、社員を統率とうりつできませんから」

「君は自力で結果を残しているのだから、誰もそんなことは言いわないと思うが、そうしたいと思うなら、それで構かまわない。我が社は優良企業だから、多角経営を目指す君の損そんにはならないと思うよ」

「もちろんです。では、さっそく明日から話を詰めていくことにして……」

恐ろしいことに、誰も晶末の意見など聞いてもくれない。これまで祖父の言うことにはおとなしく従したがってきたが、自分の人生を大きく左右することを勝手に決められてはかなわない。

「ちよつと待って！」

晶末は大声を出して、祖父と宏哉の会話に割きって入いった。すると、二人は眉をひそめて、こちらを見た。

「なんだね、晶末？ そんな大声を出すものではないよ」

「お祖父様！ 大声を出したくもなるわ！ わたしは結婚するなんて一言も言いってないのに！」

祖父は驚おどいたように目を見開ひらいた。

「まさか、おまえ、宏哉君と結婚したくないと言うんじゃないだろうね？」

晶末は宏哉の顔をちらつと見て、頬を赤く染める。こんな形ではなく、愛されて結婚したいなどとは言えなかった。

「だ、だって……こんなの政略結婚みたいなものじゃないの。わたし……普通に恋愛結婚がしたいの。素敵な男性に告白されて、交際して、それからプロポーズされたいのよ！」

その相手は晶末にとって宏哉しかいないのだが、具体名を挙げるわけにはいかないので、そこはぼかした。すると、当の宏哉は晶末が夢物語のようなことを言っているとても思ったのか、鼻で笑う。

「な、なんで笑うのよ！ わたしは真剣よ！ 一生のことなんだから、勝手に決めないでもらいたいわ！」

宏哉は肩をすくめてみせてから、祖父に向かって冷静な口調で言った。

「しばらく、晶末さんと二人だけで話をさせてもらえませんか？」

「ああ、構わない。書斎を使うといい」

あまりに頭に来たので、話すことなんか何もないと突っぱねたくなったが、同時に、彼と二人きりになるチャンス逃したくなかった。まったく矛盾しているとは思いが、こんな状況でも彼を好きな気持ちは変わらない。

「晶末……行こう」

彼の魅力的な目に見つめられると、嫌だとは言えない。腹は立っていたものの、晶末は彼につい

ていった。

居間を出て、玄関ホールを横切ると、小さなパーティーなら開けるくらい広い客間がある。その奥に、祖父の書斎があった。

書斎に入って扉を閉めるなり、宏哉は晶末の手首を掴んで壁に押しつけた。そして、もう片方の手を壁につく。彼の顔が、今にもキスできそうなくらい近くにあって、晶末はドキドキしてくる。

しかし、彼は当然キスなんかしてこなかった。クールな眼差しを晶末に向け、先ほどのことについて問い詰めてくる。

「それで、君はどうして僕との結婚を拒否して、お祖父さんとお祖母さんを悲しませるんだ？」

そんなことを言われると、自分がとてもひどいことをしたような気がして、晶末の胸に罪悪感が湧き起こる。

でも……でも、わたしは悪くないわ！

勝手に結婚相手を決められた上、その相手が祖父の会社欲しさに結婚を承諾したとあっては、黙っていられなかった。いや、たとえ会社のための結婚だとしても、晶末の意思を確認するべきだ。それすらもなく、祖父と宏哉の間で決定されようとしていたのが、何より嫌だった。

それにしても、彼の顔が近すぎて困る。こんなに近くでじっと見つめられていると、動悸がしてきて、胸が苦しくなる。

晶末は彼の眼差しに屈しないように、ぐっと睨みつけた。

「だって、結婚を勝手に決められたのよ。それも、まるで会社のおまけみたいに扱われて」

「いや、君はおまけじゃないよ」
宏哉はそう言ったものの、やはりおまけとしか思えない。会社付きでなければ、彼は晶末と結婚しようなんて、思いもしなかったに違いない。

「でも、わたしと結婚したかったわけじゃないでしょう？ いつもいつも、わたしに対して怒っているもの。わたしだって、あなたに逆らってばかりいる。そんな相手と結婚したいはずがないわー」
そう言いつつも、できれば自分の言葉を否定してほしかった。『そんなことはない、君のことが好きだから結婚したいんだよ』と言ってほしかった。

しかし、残念ながら彼は否定しなかった。その代わり、晶末を説得しようと決心したらしい。

「まあ、よく考えてくれ。これは悪い話じゃないよ。お祖父さんは君と会社の将来を憂えた結果、信用できる男に託そうとしたわけだ」

宏哉は、自分のことを信用できる男だと言い切った。他の男が言ったなら、晶末は笑い飛ばしただろう。だが、彼は確かに祖父に信用されるだけの力を持っているので、軽く領いた。

「僕のほうも、君のお祖父さんが好きだから、その願いをかなえてあげたい気持ちがある。彼の本当の孫になるなんて光栄なことだしね。それに、君も……悪くない」

祖父のことは『好き』なのに、晶末については『悪くない』なのか。晶末はカッとした。

「悪くないなんて言い方はやめてよ！」

宏哉はクスツと笑う。

「確かに言い方が悪かったね。君は可愛いよ。性格についても、結婚するのに問題はない。それに、君のお祖父さんやお祖母さんにとって、僕は孫娘の夫として最高の相手だと思う」

孫娘の夫として最高の相手……

そこまで言うかと思ったが、それは真実だった。たとえば、晶末が他の男性を好きになったとして、祖父母も気に入るとは限らない。けれども、宏哉なら完璧だ。祖父母は彼のことを気に入っているし、宏哉のほうも、間違いなく祖父母の面倒を見てくれるだろう。それだけの愛情や責任感を持っているからだ。

だからこそ、わたしは彼が好きなんだけど……

でも……でも……やっぱり、そんなのおかしい！

少なくとも現代日本において、そんな理由で結婚するのは変だ。家や会社より、お互いの気持ちのほうが大事ではないだろうか。つまり、宏哉が晶末を愛してくれているならいいが、そうでなければ結婚したくない。

意固地だと思われようと、晶末は彼に愛されたかった。祖父母の持ち出すのでなく、別の方法で説得してほしかったのだ。

たとえば、この場でキスするとか……

せめて、抱き締めて好きだよと言ってくれたら、すぐに結婚を承諾するのにな。

だが、こんなに近くで顔を突き合わせていながら、彼にはキスする素振りなど少しもなかった。つまり、晶末にはキスしたいとも思わないのだろう。これは屈辱的だ。

結婚したら、キスだけでは済まない。もつと親密な行為もしなくてはいけないのだ。晶末としては、宏哉になら何をされてもいいという気持ちがある。けれども、宏哉の側にはそんな気などさらさないように思える。

やっぱり……ダメよ。

不幸になるのは目に見えている。いかに祖父母が喜ぶとしても、当人同士が喜んで結婚できなければ意味がない。

「わ、わたし、やっぱり……無理よ！」

宏哉は眉根をギュツと寄せ、非難の眼差しをこちらに向けてくる。

「君は、お祖父さんを安心させたくないのか？」

「それは……安心させてあげたいけど……」

「会社のことだって心配だろう？ 君はそこで働いているわけだし、会社を愛しているんじゃないのか？」

確かに会社のことは心配だが、それとこれとは話が別だ。

「わたしが……わたしが、お祖父さんの会社を継げばいいんだけど……」

晶末がそう言った途端、宏哉は両手を壁から離し、急に笑い出した。

なんて失礼な人かしら！ わたしは真面目に言っているのに。

ムツとしていると、彼はようやく笑うのをやめた。

「君が会社でどんな仕事をしているか、お祖父さんから聞いているよ。コピー取りや書類整理しか

してないんだろう？ 君が社長になったら、さぞかし大変だろうな」

晶末は顔が真っ赤になるのがわかった。恥ずかしいのもあるが、怒りもある。今の自分では社長になれないとわかっている。しかし、そのことで彼に馬鹿にされたくはない。

「わ、わたしは何も今すぐ社長になるなんて言っていないわ！ ただ、いずれ後を継げたらいいと思っていたのよ！」

「君には無理だ。そういつたことには向かないよ」

宏哉にあっさり否定されて、晶末はショックを受けた。

今の段階では無理かもしれないが、将来はわからない。一年後、五年後、十年後には、大きなことを成し遂げられるような人間になっているかもしれないというのに。

宏哉自身も、最初から実力があつたわけではないだろう。父親に認められようと、必死で頑張ってきたはずだ。そしてついに、自分の力を父親に認めさせるに至ったのだ。それなのに、どうして晶末にはできないと決めつけるのか。

ふつふつと怒りが込み上げてくるが、晶末はなんとか抑えた。

「じゃあ……わたしには何が向いているっていうの？」

そう尋ねると、宏哉は手を伸ばして、晶末の頬に触れた。眼差しが今までと違って、なんだか色っぽく感じる。晶末は急にドキドキしてきた。

彼は微笑み、晶末の頬をそっと撫でる。

「君は、このままでいい。僕の花嫁になって、好きなことをすればいいんだ」

これほどの侮辱はない。

彼は、晶末にはなんの能力もないと思っっている。何もできないのだから、一生好きなことをして遊んでいればいいということか。

こんな男を好きな自分が愚かに思えてきて、晶末の目に涙が滲んでくる。宏哉は晶末の涙に気づいて、困惑したような表情になった。

「なんで泣くんだ？ 泣くほどひどいことを言ったかな。それとも、感動して泣いてるとか……？」あまりにも鈍感な彼に、晶末はどうとう我慢できなくなった。

「あなたとなんか、絶対に結婚したくない！」

大声で怒鳴った晶末を、宏哉は不機嫌な表情で睨みつけ、それから大きな溜息をついた。仕方のない奴だとても言いたげに。

先ほどはああ言ったものの、祖父母を心配させたくなかったので、晶末は少し考えさせてほしいと言って、自分の部屋に引きこもった。それでも、きっと二人は心配しているはずだ。自分が宏哉と結婚すると言えば、恐らくすぐに安心するだろう。

それがわかっていても、晶末には言えなかった。

もちろん、宏哉のことは好きだ。片意地を張って彼と結婚できるチャンスを棒に振るのは、馬鹿しいとも思う。けれども、自分との結婚を承諾させるために彼が言ったことは、晶末にとって我慢ならないものだった。

彼はわたしの気持ちをも、少しもわかっていない。それどころか、わたしの気持ちなんてどうでもいいんだわ。

そんな相手と、生涯を共に過ごせるだろうか。宏哉は晶末を愛していないのだから、ひよつとしたら浮気するかもしれない。いや、浮気どころか、彼が運命の恋に落ちたらどうすればいいのだろう。

そんな起こってもいけないことを、今から考えても仕方ない。そうは思うものの、やはりこんな関係のまま結婚しても、長続きしないのではないか。

晶末は結婚するからには、一生添い遂げたい。離婚は絶対したくないし、浮気なんてするつもりは毛頭ない。できればたくさんの子供に恵まれて、幸せな家庭を築きたかった。たとえ子供がいなくとも、お互いが愛し合っていれば幸せにはなれるだろう。

でも……

宏哉は晶末を愛しているとは言わなかった。彼は晶末ではなく、祖父の会社が欲しいのだ。もっと事業を拡大して、父親に自分の能力を見せつけたいのかもしれない。

せめて……せめて好きだと言ってほしかった。おざなりに、可愛いなどと言うのではなくて。そして優しくキスしてくれば、その言葉を信じられたかもしれないのに。

彼は子供に言い聞かせるように、晶末をたしなめていた。これからもずっと、ああして子供扱いして、自分の意見を押しつけてくるのだろうか。

それに……祖父が晶末でなく宏哉を後継者に指名したことも、ショックだった。

いつかは自分があの会社を継ぐつもりでいたのに、祖父は決してそうは思っていなかった。晶末が女だから、能力のあるなしなど、最初から問題にしていなかった可能性もある。そうだとすれば、ろくな仕事を与えられなかったのも、恐らく祖父の指示によるものだろう。

そもそも、晶末が入社できたのだって、祖父のコネがあったからこそだ。晶末は特別扱いされたくなくて、他の会社を志望していた。だが、宏哉がお祖父さんの気持ちを考えろと説教してきたから、そのとおりにしたのだ。

そして、わたしはただ無為に時間を過ごしてきた……

何か資格を取ったり、技能を身に付けたりすればよかった。他に自分がやりたい仕事を探し、そのために努力をすればよかった。

そうすれば、祖父が会社を宏哉に任せると宣言したところで、これほど悲しくはならなかったかもしれない。

もし、このまま宏哉と結婚したら、きつと自分は劣等感に苛まれるだろう。たとえ理想の家庭を築いたとしても、心の片隅に何か引つかかったままだと思う。

まして、宏哉からは愛されていないと知っていながら、彼の可愛い妻でいなくてはならないのだ。彼は一生、晶末のすることに文句を言い続けるかもしれない。

晶末はそう考えて、ぞつとした。

祖父母に心配をかけたくないがために我慢していたことが、晶末にはたくさんある。今思えば、それも宏哉にそう仕向けられてきたのだ。

髪を染めたことも、門限を破ったこともない。友達との付き合いも控えめにして、飲み誘われでも、ついていったことはない。会社の歓迎会や忘年会にだけは参加してきたが、そこでもアルコールは一杯しか飲まなかった。

品行方正なお嬢様。それが、周囲の人間から見ただけのイメージだった。もう……こんないや！

晶末は突然、何もかも嫌になってしまった。

祖父母に心配はかけたくないし、宏哉と結婚もしたい。この機会を逃したら、彼が晶末と結婚する気になることは二度とないだろう。

それでも……やっぱりできない。

もう優等生は卒業しよう。いつもいつも、祖父母と宏哉の言いなりになってきた。だが結婚のよいうな一生を左右することまで勝手に決められるのは、断じて許せない。

だから……

晶末は決心した。

家を出て自活しよう。会社を辞めて、新しい仕事も自力で探そう。そして、こんな自分にもできることがあるのだと、自信を持てるようにしたい。

そこで晶末は、先ほどまで目の前にあった宏哉の顔を、ふと思い出した。

彼と別れることは、とてもつらいけど……

やっぱり、わたしは愛されたいの。

愛されて結婚したいの。

晶末は彼への想いを断ち切るためにも、家を出なくてはならないと思った。

2

宏哉は須藤家の屋敷から自分のマンションに戻ると、がらんとしたリビングを目にして、深く溜息をついた。白と黒を基調としたスタイリッシュなインテリアは、高層マンションの最上階にあるこの部屋によく似合っている。だが、そこには自分以外の誰もおらず、物寂しい感じがした。

一人暮らしなので他に誰もいないのは当たり前だが、須藤家を訪れた後は、いつもこんな気分になってしまう。それはきつと、このマンションの部屋に家族がいなせいだ。

もうそろそろ結婚してもいい頃だとは思っていた。自分には妻が必要だ。そして、子供も。

それにしても、晶末の祖父があんなことを考えていようとは、思いもしなかった。恐らく彼は、宏哉が晶末を好きなことに気づいていたのだろう。宏哉が須藤家を頻繁に訪れるのは、特に晶末に会いたいからだとも。

宏哉は上着を脱ぎ、ソファの背もたれにかけた。そして、ネクタイを緩めて、シャツのボタンをいくつか外す。窓からは、たくさんの宝石のような街の灯りが見える。しかし、どんなに夜景が美しくとも、それを分かち合う相手がなければ空しいだけだと気づいてしまった。

ここに晶末がいてくれたら……

彼女が傍にいて、昔みたいに微笑んでくれたら、どんなに幸せな気分になることか。

今日の晶末も綺麗だった。同時に、どうしようもなく可愛くてたまらなかった。もつとも、宏哉がそんな気持ちを抱えていることに、彼女は少しも気づいていない。それは宏哉が、彼女への想いを隠してきたからだ。口やかましい兄のように振る舞ってきたので、むしろ彼女を嫌っていると思われるかもしれない。

晶末を女性として意識し始めたのは、彼女が二十歳になった日からだ。

それ以前は、子供だと思っていたし、こんな妹がいたらいいな、くらいにしか思っていなかった。だから、兄のように温かい目で見て、時には甘やかし、時には叱つてやるという接し方をしてきた。宏哉の両親や祖母は、昔から兄の聖哉にはかり注目している。宏哉が愛されていなかったというわけではないが、いつも兄と比べられてばかりいた。そんなわけで、実家より須藤家のほうが居心地がよかったのだ。

晶末の祖父も、宏哉が遊びにいくと歓迎してくれた。二人は温かみがあり、愛情深い。彼らが溺愛する晶末を、宏哉も本当の妹みたいに可愛がった。晶末を可愛がることで、自分も須藤家の人間になれる気がしていた。妹と思うには、ずいぶん年が離れていたのだが。

晶末は幼い頃、よく口にしていた。

『宏哉お兄ちゃんのお嫁さんになる』と。

もちろん、年頃になると、そんなことは言わなくなった。それでも、宏哉を兄のように慕って

てくれた。彼女が高校生の頃は冗談めかして、二十歳になったら大人みたいなデートをしてほしいと言っていた。

彼女は可愛い顔をしているので、その気になれば、デート相手の一人や二人見つけれただろう。しかし、あまりその方面には興味がなさそうだったし、何より彼女の祖父母が異性と遊び回ることを許さなかった。そんなこともあって、宏哉となら二人で出かけることを祖父母に許してもらえないのではいかと、晶末は考えたに違いない。

実際、二十歳の誕生日に晶末をデートに連れていくと彼女の祖父に話すと、意外なほどあっさり許してもらえたのだ。

もつとも、あの頃から、彼は宏哉を婿にしようと思っていたのかもしれないが。もしそうだとしたら、彼はデートの顛末を知って落胆したことだろう。

あの日、妹を遊びに連れていくような気持ちで、須藤家に迎えにいった宏哉は、玄關の扉を開けてくれた晶末の姿に、思わず見蕩れてしまった。

ホテルのレストランで食事をするから、それなりの装いをするようにとは言っておいた。それでも、その姿があれだけ大人っぽく見えるとは想像していなかった。

彼女はもう大人だった。決して派手ではない清楚なワンピース姿だったが、なんとも言えない清潔感のある色気を感じた。彼女を腕に抱いて、艶々した黒髪を撫でてみたいと思った。そして、キスをした我也想いとも。

けれども、今まで妹みたいに思っていた相手に、そんなことはできない。晶末のほうだって、宏哉のことを兄のように思っているはずだ。初めてのデートに頬を染めている彼女の信頼を、裏切ることではできなかった。それに、もし手を出してしまったら、にこやかに送り出してくれた彼女の祖母にも申し訳が立たない。

動揺するあまり、宏哉は彼女の格好を褒めることすらできなかった。妹として見ていたときには、気軽に可愛いと言えていたのに、女性として意識した瞬間から、言えなくなってしまったのだ。

それでも最初は、いつもどおり振る舞おうとしていた。だが、車の中で二人きりになると、余計に意識してしまい、次第に口数が少なくなった。レストランでは黙り込んでしまい、彼女が戸惑っているのがわかっていたのに、安心させてやることができなかったのだ。

それまで何人もの女性とデートをしてきたが、そんな状態になったのは、高校生のとき以来だった。

本当は、大人の男らしいデートを演出するつもりでいた。格好よくエスコートして、晶末を喜ばすつもりだったのだ。だが、宏哉は彼女に触れることすらできなかった。少しでも触れれば、きつと抱き締めてキスをしてしまっただろうから。

そんなわけで、せっかくの二十歳の誕生日なのに、彼女を楽しませることができなかった。はっきり言って、それどころではなかったのだ。胸の内に吹き荒れる欲望の嵐に、抵抗するので精一杯で。

晶末が素晴らしいのは、外見だけではなかった。素直な心や、祖父母への愛情を持っている。帰りの車の中でむっつり黙り込んだ宏哉を、疲れたのではないかと心配してくれる優しさもある。彼

女のことは昔から知っているから、それが見せかけだけでないことは、よくわかっていた。

そのデートの日以来、晶末のことが頭から離れなくなった。

彼女の美しさや優しさ。そして、初めて知った清潔感のある色気。

一度でもいいから、彼女を思う存分抱き締めて、キスをしたい。けれども、本当の祖父母のように思っている人たちの孫娘に、そんな欲望を抱くわけにはいかなかった。当然、実行など移せない。

それに、自分が晶末に抱いているのは単なる欲望だけではなかった。もちろん彼女を抱きたい気持ちはある。しかし、もっと純粋な気持ちもあるのだ。

晶末と結婚して、一生大切にしていきたい。彼女は一途だし、決して裏切らないだろう。子供にも愛情を注ぐに違いないし、二人で幸せな家庭を築けるはずだ。

そう。宏哉は晶末を愛している。

晶末のほうに、他に好きな人がいないとは限らない。だが、もしそういう相手がいても、ロマンティックに囁けば、あっさり落ちてくれるのではないか。デートしていたときに彼女の表情を見ていたら、そう思えた。

だが当時は、晶末が二十歳だということが気にかかった。

成人したとはいえ、まだ大学生だし、若すぎた。世間をまったく知らない彼女に、結婚だ子供だと、自分の希望を押しつけるわけにはいかない。かといって、彼女が大学を卒業するまでの二年の間、プラトニックな恋愛で我慢などできそうになかった。

晶末とは付き合えない。けれど、今までのような気軽な関係にも戻れない。となれば、自分でできるのは、彼女を遠ざけることだけだった。傍にいれば、意識してしまうからだ。そんな自分の気持ちも、彼女に悟られてはいけなかった。

それ以後、宏哉は自分の気持ちを押し隠すため、以前よりずっと厳しく振る舞うようになった。やがて彼女が大学を卒業し、働き始めてからも、それは続いている。自分と付き合うまでは、無垢であってほしい。性に奔放な今時の女性には、なつてほしくなかったのだ。

晶末は祖父の意向で、会社でも守られていた。彼女は知らないだろうが、変な虫がつかないよう上司に見張られていたのだ。それでも、宏哉は気が気でなかった。彼女に微笑みかけられるだけで、好きになる男もいるだろう。

一方、口やかましい兄に变身した宏哉は、彼女に嫌われてしまったらしく、昔のように微笑んでももらえない。

男として意識してもらうには再び变身が必要だったが、今さらどうすればいいかわからなかった。昔みたいに優しくしたり、甘やかしたりすればいいのだろうか、上手くできないのだ。

そんな状況の中、彼女の祖父から、あの爆弾発言が出た。

晶末と結婚できる……

はつきり言って、須藤建設のことなど二の次だった。いや、もちろん晶末の祖父にとつて大事な会社だし、蔑ろにするつもりはない。しかし宏哉が欲しいのは、会社ではなく晶末なのだ。

とはいえ、それを表面に出してしまうと、彼女が怖がるかもしれない。だから、この結婚は二人

のためになり、かつ彼女の祖父母も喜ぶことなのだと言った。冷静に諭した。

晶末が理解してくれるといいのだが。まあ、考えてみると言ってくれたのだから、とりあえずそれでいい。それに彼女が、祖父母を悲しませるようなことをするはずがない。

あのデートから三年経つが、その間、他の女性に目を向けたことは一度もない。晶末を求め続けていたし、愛し続けていた。その気持ち、やっと報われる。

いや、まだ報われるとは限らない。彼女を妻にしたところで、愛を返してもらえないのなら、つらいだけだからだ。

だが、これが第一歩だ。結婚を承諾してもらえたら、これを機に晶末に優しくしよう。そして、自分を愛してもらえようように努力しよう。

書齋で二人きりになったとき、キスしてしまいたかったが、懸命に我慢した。けれど婚約したら、もう遠慮することはない。三年間抱きたかった身体を抱き寄せ、触れたかった唇にキスをしよう。

晶末に男として見てもらいたい。

もし、その願いがかなったら……

きつと最高に幸せだろう。

宏哉は彼女への想いで胸を熱くした。

宏哉が晶末の祖父から連絡をもらったのは、三日後のことだった。

自分の会社の社長室で、秘書に指示を出していたときに、電話がかかってきたのだ。

「大変だ。晶末が家出してしまった！」

その言葉に、晶末と結婚してくれと言われたときより驚いた。

考えてさせてくれと言っていたのは、その場しのぎの嘘だったのだろうか。それとも、考えた結果、家出に踏み切ったのだろうか。

「書き置きとかはありましたか？」

「ああ。』このままうちにいたら、君との結婚を承諾したものとされるから嫌だ』と。それから、うちの会社に退職届を郵送したらしい。『しばらく自活するけど、心配しないでくれ』とも書いてある」

宏哉はショックを受けていた。あの晶末が祖父母を置いて家を出なくなるほど、自分は嫌われていたのかと。

それに、心配しないでくれと言われても……心配するに決まっているだろう！

「どこに行っただか、心当たりはないですか？」

「友達のところへ行くと書いてある。恐らく、清佳ちゃんのマンションじゃないかと思う。彼女がルームメイトを探していると、晶末が少し前に話していたから」

清佳というのは、晶末の小学校時代からの親友だ。彼女のところにいるのなら、少しは安心できる。

「とにかく……そちらに行きます」

宏哉は仕事を早めに終わらせて、須藤邸に向かった。居間に入ると、晶末の祖母は泣き腫らした

た目をしており、祖父のほうは、うろろと落ち着きなく歩き回っている。二人は宏哉の姿を見て、ほっとしたような顔をした。

「晶末と、やっと連絡が取れたよ。やつぱり清佳ちゃんのところにいるらしい。帰ってきてくれと言っても、まったく聞き入れてくれない。宏哉君、晶末を迎えにいってくれないか？」

宏哉も、できればそうしたかった。箱入り娘の彼女が箱から出たら、一体どうなってしまうのだろう。男に誘われてふらふらとついていくような娘ではないと思うが、今まで大事にされすぎていたので、反動があるかもしれない。

晶末の祖父も宏哉も、彼女を抑えつけすぎている。無理に連れ戻したとしても、いい結果は生まないだろう。

「考えたのですが……晶末さんを、少し自由にしてあげたらどうでしょう？」

「自由だって？ とんでもない！ そんなことをしたら、大事な孫娘がどこかの狼に攫さらわれてしまうんじゃないか。私は宏哉君だから、晶末のことを任せられると思ったんだ。君だって、晶末と結婚したいんだろ？」

やはり、彼は宏哉の気持ちに気づいていたのか。宏哉は苦笑する。

「もちろん、結婚したいと思っています。けれど、彼女にはまだその気がないみたいです。だから、時間をかけて、彼女を振り向かせたいと思います。今、無理しても、彼女は反抗心を募らせるだけでしょうし」

晶末の祖父は少し考えていたが、やがて頷いた。

「確かに……そうかもしれないな。だが、これだけはわかってほしい。私は君たちが結婚すべきだと、急に思いついたわけじゃない。昔から二人の様子を見てきて、そうするのが一番だと考えたんだ。君なら晶末を幸せにできるし、会社を存続させられる。君がまだ学生の頃から、私はそう思っていたんだよ」

宏哉は、彼に認めてもらえたのが嬉しかった。父親にさえ、最近まで評価してもらえなかったからなおさらだ。

「ありがとうございます。僕が晶末さんを幸せにできると思ってくださいたくさって嬉しいです。でも晶末さんは、そうは思ってくれていない。それどころか、ひよっとしたら僕のが嫌いなのもかもしれません……」

「そんなことはないわ！」

晶末の祖母が、急に割って入ってきた。

「あなたのこと、晶末はとても好きなのよ。好きでなきや、からかわれたってあんなにムキになつたりしないもの。ただ、急に結婚話を押しつけられたのが嫌だったのよ」

そういうものだろうか。女性の心理にはそれほど詳しくないが、祖母がそう言うなら、まだ望みはある。

「とにかく……何か方法を考えます。彼女を口説く方法を」

宏哉が言うのと、晶末の祖父はニヤリと笑い、微笑む祖母と頷き合った。

「そうだな。あの娘を口説いてやってくれ。ロマンティックに花を贈ったりするといい」

そんなもので彼女の機嫌が直るかどうかわからないが、よさそうなことならなんでもやってみようという覚悟はある。どうあっても、宏哉は晶末が欲しいからだ。他の男になど、絶対に渡すつもりはない。

「お二人とも、次に晶末さんから連絡があつたら、たまには顔を見せるようにと言つてあげてください。お二人が淋しいと言えば、きつと優しい彼女は心を痛めて、頻繁に連絡してきますから」

「確かにそうだろうな。あの娘はとてもいい娘だから。宏哉君……頼むよ」

「はい。できるだけのことほします」

宏哉は二人に約束した。

自分と晶末だけの問題ではない。彼女の祖父母も、会社も関わっているというのに、晶末は何かも捨てて逃げ出した。とはいえ、彼女は決して無責任な性格でも、自分の不始末を他人に押しつける卑怯な人間でもない。そんな彼女が逃げ出したくなった原因は、やはり結婚話を早急に進めすぎたせいなのだ。

そうは思つても、宏哉は彼女とようやく結婚できると思うと、嬉しくてたまらなかつた。本当はすぐにでも入籍して、一緒に住みたいくらいだ。

晶末をロマンティックなやり方で口説こう。誘惑して、僕のものにしよう。

宏哉は、そのための作戦を練ることにした。まずは探偵を使つて、彼女の生活パターンを調べさせる。それから、どうにかして彼女に近づくのだ。

* * *

晶末は東野清佳のマンションで、これからのことについて考えていた。

清佳は子供の頃からの親友で、とても信頼している相手だ。彼女がちょうどルームメイトを探していたのは、晶末にとつて都合良かった。祖父母も清佳のことはよく知っているから、ここにいると言えば、きつと安心するはずだ。

清佳の家も資産家である。祖母の遺産で、彼女はこの3LDKの部屋を中古で買ったのだ。新築と言つても差し支えないほど新しく、交通の便もいい。

彼女がルームメイトを欲しがっていたのは、お金の問題ではなく、単に一人では淋しいからだつた。かといって、誰かと同棲したりはできないという。一人暮らしを始めるときに、結婚するまで男性とは住まないと、親と約束したらしい。

そんなわけで、清佳は晶末を喜んで迎え入れてくれた。

リビング、ダイニング、キッチンが共用で、清佳の部屋を除いた二部屋のうちのひとつを晶末が借りることになった。もうひとつの部屋は和室で、そちらは来客用として使うのだという。今日は、その部屋に泊まることになっている。何しろ寝具も何も、まだ用意していないのだ。それでも、ホテルに泊まるより、清佳のところに行ったほうが安心できる。

リビングのソファで、これからすべきことをメモしていると、清佳がコーヒーを持ってきてくれた。

「まずは買い物からね。でも、調理器具や食器はうちにあるのを使っていいいんだし、とりあえず自分に必要なものから買い集めればいいよ。布団だって、しばらく来客用のを使ってもらって構わないから」

姉御肌で、さばさばした性格の清佳は、いつもこんなふうに寛容だった。
「ありがとう。本当に感謝してるわ」

「晶末がルームメイトになってくれて、わたしも感謝してる。一人じゃ淋しいけど、気が合わない人と一緒だと苛々するもの。晶末と一緒に住んでくれるなんて、ラッキーだよ」

清佳が本心からそう言っているようにだとわかり、晶末はほっとする。嫌々受け入れてもらいうらいなら、一人暮らししたほうがましだからだ。

「でも、まさかわたしが家出をするとは思わなかったでしょう？」

「まあね」

清佳はニヤリと笑った。

彼女は小柄な晶末と違って、背が高く、出るべきところが出ているグラマラスな体形の美女だ。ファッションもいつもあか抜けていて、晶末はそんな彼女を羨ましく思っていた。その上、突然家出してきた友人をこうして受け入れてくれる、優しい性格の持ち主なのだった。

「晶末も思い切ったことをしたのね。でも、こうでもしないと、あの家から出られなかったんじゃないの？ お祖父さんもお祖母さんも過保護みたいだから。まあ、一人しかない孫娘が心配なのはわかるけど」

確かに、いきなり家を出るなんて、自分でも思い切ったことをしたものだと思う。しかし清佳の言うとおり、そうでもしないと、家を出ることはできなかっただろう。それに、あのまま家にいたら、きつと宏哉が晶末の罪悪感を刺激するようなことを言ってきたと思うのだ。高齢の祖父や祖母を、安心させたくないのか、と。

もちろん、晶末は二人に心配をかけたくなかった。だから、わざわざ友達のところへ行くと書き置きしてきたのだ。その友達が清佳であることは、祖父にもすぐに見当がついただろう。彼女がルームメイトを探しているという話を、つい数日前にしたばかりだから。

祖母は晶末のスマートフォンに、何度も連絡を入れてきた。最初は無視していたものの、彼らがどれだけ心を痛めているかと思うと、やはり無視することはできず、電話に出た。清佳のマンションにいと知って、明らかにほっとした様子になった祖父に、晶末は謝った。けれども、自分は宏哉との結婚を強制されたくないから、自活するのだと宣言した。

とはいえ、家を出たままではいられないとわかってもいる。ただ、彼らに認めてほしいだけだ。晶末にだって、結婚以外の道があるということ。そのためには、まず自信を持たなくては。自分でなければ、他人を説得できない。

そういえば、家出の理由について、まだ清佳に詳しく話していなかったと晶末は気づく。彼女は何も尋ねてこないが、親友に何も言わないのはよくない。まるで、彼女のことを信じてないみたいだからだ。

「わたし、実は、祖父が気に入った人と結婚させられそうになって……」

「え……今時？ それって政略結婚みたいな感じ？」
驚いている清佳に、晶末は自分が祖父の会社のおまけとして結婚させられそうになっていることを話した。

「そんなのひどい！ いくら晶末のことが心配だからって、好きでもない人と結婚させようだななんて……」

「好きでもない人なら、まだよかつたんだけど」

ほつりと呟く晶末に、清佳は大きく目を見開いた。

「どういうこと？ 晶末は恋愛に関しては秘密主義だから、わたしもあえて訊かなかつたけど、実は好きな人がいたの？ それがその相手なの？」

清佳に限らず、今まで晶末は自分の恋のことを、誰にも話したことがなかった。淡い初恋から始めて、もう長い間、晶末の心は宏哉のことでいっぱいだ。だが、完全な片思いに違いないので、人に話す気にはなれなかつたのだ。あの二十歳の誕生日のときのこと、心の奥に仕舞ったままで、誰にも言ったことはない。もつとも、宏哉と付き合うことにでもなっていれば、親友の清佳には、きつと話していたと思うが。

「祖父の親友の孫で、子供のときから知っている人なの。でも、ずっと片思いなのよ。向こうはわたしのことを、妹みたいに思ってる。興味を示してくれたことなんか一度だつてないわ。それなのに、会社のためなら結婚までするのかわかと思うと……」

「それは落ち込むわね……」

清佳は晶末の気持ちを理解してくれた。

「祖父は彼と結婚するのがわたしの幸せだと信じてるし、彼のほうも祖父を心配させたくないなら、言うことを聞くべきだつて言うの。わたし、今までずっとそうしてきたわ。でも、結婚のことまで言いなりにはなりたくない。だから家を出て、会社も辞めたの」

「ええっ？ 会社も辞めたの？」

清佳は、またもや驚いていた。

会社をいきなり辞めるなんて、社会人にあるまじきことだとわかつてはいる。けれども、晶末が辞めたからといって、会社に迷惑などかからない。それどころか、ほつとする人間が社内にも何人もいることだろう。

晶末は上司にも同僚にも、腫れ物に触るような扱いをされ続けてきた。入社して一年が過ぎても、当たり障りのない雑用ばかりさせられていた時点で、本当は辞めるべきだったのだ。もつとも晶末のほうは、結婚話が出るまで、いつかは自分が会社を継ぐものだとばかり思っていたわけだが。

しかし、祖父にはそんな気など最初からなかった。もし晶末と結婚しなくても、きつと宏哉に会社を任せるのだろう。

そう……祖父の引退に、晶末と宏哉の結婚など、本当は必要ないのだ。

「家賃や生活費のことは心配しないで。わたし、貯金があるから」

「それは心配してないわ。でも、須藤建設って、お給料よかつたでしょ？」

清佳の父も会社を経営しているが、彼女はその会社には入らなかつた。自分の進みたい道を歩む

ために、アパレルメーカーで働いている。そうして自立しているからこそ、給料のことが気になるのだろう。

「でも……わたし、お給料に見合わない仕事しかしてこなかったわ。これから仕事を探すけど……自分が何をしたいのかもわからないの。まずは、それから探さなくちゃ」

今思えば、もっと前から考えておけばよかった。高校時代とは言わずとも、せめて大学時代には、自分の進む道を決めるべきだったのだ。

「それなら、しばらくバイトをすれば？ その間に、自分のしたいことが見つかるかもしれないし」

「バイト！ そうよ、わたし、一度バイトを試してみたかったの！」

それも大学生のときに経験すべきことだったかもしれないが、過保護な祖父母はバイトも禁止していた。バイトなんかしたら、孫娘が不良になるとでも思ったのだろう。本当に、今まで大事に大事に育ててくれたのだ。そんな祖父母に感謝の気持ちはあるが、もう少し自由にさせてくれてもよかったと思う。

「晶末は箱入り娘だもんね。バイトも、きつと晶末には必要なことよ」

「うん……。自由になったんだから、これからは何をしてもいいのよね。髪を染めたり、パーマをかけたりもしてみたいわ」

「こんなに綺麗な黒髪なんだから、もつたいない気もするけど。カラーやパーマは髪が傷むからねえ。あまり早まらないほうがいいわ。それに、晶末がしたい仕事の種類にもよるけど、バイトや就

職の面接では黒髪が有利よ」

そう言われればそうだ。もつたいないというのも頷ける。昔から友人達が、晶末の黒髪を羨ましがっていたからだ。

「でも、お嬢様のイメージを変えたいの」

「それなら、ウィッグをつければいいわ。いくらだって、好きな髪型にできるわよ。あと、服装も変えるんでしょ？ よかったら、わたしが新しい晶末をプロデュースしてあげようか」

その清佳の申し出に、晶末は飛びついた。

「本当？ やった！ わたし、清佳のファッションセンスに憧れていたの」

「えっ、そうなの？ 照れるなあ。大したことないけど、一応、そういう業界にいるから、いろいろお手伝いができるはずよ」

晶末は変身した自分を想像して、興奮してきた。

わたしは、これまでと違う自分になる。

そして今度こそ、自立した大人になるのだ。祖父母のことや宏哉のことが、頭をちらりと過つたが、今は考えないようにする。

過保護な祖父母を変えるためには、荒療治も必要だろう。二人を困らせたくてやっているわけではないし、反抗したいがための行動でもない。

たぶん、お祖父様もお祖母様もわかってくれるわ……

ただ、宏哉はどうだろう。彼は晶末が家出したと聞いて、どう思っただろう。晶末には結婚を